

松岡正子著

# 青蔵高原東部の チャン族とチベット族

—— 2008 汶川地震後の再建と開発【論文篇】

あるむ／2017年3月／542+2頁／8000円+税



河合洋尚

本書は、著者が一九八九年から四川省の少数民族地域を中心におこなってきた調査研究の成果である。論文篇と写真篇の二冊組になっており、論文篇だけでも五〇〇頁を超える大著である。論文篇は、第一部「チャン族」と第二部「四川チベット族」に分かれ、さらに付録として論考「四川における一九五〇～六〇年代の民族研究」が収録されている。この書評では論文篇を対象とする。

論文篇は、チャン族とチベット族とに研究対象が大きく分かれているが、両者の内容は連続している。むしろ、本書の重点は、著者が歴史人類学の視点から長年研究をおこなってきたチャン族にあり、チャン族の民族特性を知るためにチベット系の諸民族に考察が加えられる形となっている。換言すると、本書は、前著「松岡2000」に続き、チャン族と文化的に近似するチベット系諸民族にも焦点を当てることで、チャン族とチベット系諸民族に共通するであろう「基層文化」（四六一頁）に肉薄している。

チャン族（羌族）は、甲骨文字にも記

載がある古代「羌人」の未裔であると考  
えられている。現在の通説に基づくと、  
「羌人」は五千年前に中国北部および西  
北部に住んでいた狩猟採集民の未裔であ  
り、中国の半数以上の民族集団がその系  
統を汲む、最古の民族である。中国の学  
界でも、チベット・ビルマ語族チャン語  
群に属する言語をもつ四川省のチベッ  
ト系諸民族などは、すべて「羌人」の未  
裔であるとする汎羌論が長らく支持され  
てきた。また、夏王朝の創始者である伝  
説の帝・禹が『史記』で「禹興於西羌」  
（禹は西羌で興った）と記載されている  
ことなどから、チャン族は古代中原の華  
夏族と関連する民族であるともみなされ  
る。それゆえ、近年では、概説書や博物  
館の展示でも、チャン族の文化を「禹羌  
文化」として表す傾向が強まっている  
（第一章）。

著者は、近年のチャン族が禹との関係  
から表象されるだけでなく、この民族  
の「特色」を表す文化として、碉楼（石  
積みの家屋）、石碉（石積み塔）、白石  
崇拜、祭山会（山神を祀る年中行事）、  
シピ（シャーマン）などが挙げられてい  
ることに注目する。そして、これらの文  
化的要素は必ずしもチャン族の居住区全  
体にみられるものではない反面、他のチ  
ベット系諸民族の間に共通することがあ  
ると指摘している。

本書は、二部十一章構成であるが、そ  
の半数を超える章（第五章、第十一章）  
は、チベット系諸民族を対象としてい  
る。これらの章では、四川省・雲南省北  
部のチベット系諸民族とチャン族には言  
語・文化的な近似性があり、とりわけ  
チャン族の「特色」であるはずの右記の  
文化的要素まで存在していることが、繰  
り返し強調されている。その研究対象  
としては、黒水チベット族（第五章）、  
ギャロン・チベット族（第六章）、ナム  
イ・チベット族（第七章）、アルス・チ  
ベット族（第八章）、シヒン・チベット  
族と木里藏族自治県水洛郷の「西番」  
（第九章）、四川省と雲南省のプミ語集団  
（第十章）、四川省と雲南省のナシ族（第  
十一章）が挙げられている。

そのうち、黒水チベット族は、チベッ  
ト族に分類されているものの、チャン語  
の北部方言を話し、文化的にも類似して  
いるため、かつて民族学では「羌民」と  
みなされていた。それが一九五〇年代の  
民族識別工作でチベット族とされたの  
は、黒水人自身がチベット仏教を深く信  
仰しており、チベット族となることを強  
く望んだからである。さらに、他のチ  
ベット系諸民族の間にも、チャン族との  
言語的・文化的類似性が存在すると、著  
者は論じる。本書は、四川省に居住す  
るチベット族のうち、大集団であるアム  
ド・チベット族とカム・チベット族では  
なく、少数派にあたるギャロン・チベッ  
ト族などを扱っている。そのなかで、  
チャン族の「特色」とされる碉楼は、  
ギャロン・チベット族の地域にも分布し  
ており、さらにチベット自治区にも広く  
存在していた可能性を述べている。

その他、ナムイ、アルス、シヒン、プ  
ミは、文献上で初め「某羌」と称され、  
唐代以降に「西番」とよばれた諸集団で  
ある。民族識別工作を通して、ナムイ、  
アルス、シヒンはチベット族と認定さ

れ、プミのうち四川側はチベット族、雲南側はプミ族と分類された。しかし、民族所屬にかかわらず、これらの集團間では祭山会が広く認められている。祭山会などチャン族と共通する要素が現在どれだけ残されているかは、チベット仏教の受容、婚姻関係、他民族との共生関係によると、著者は豊富な事例をもって論じる。このことについて、著者はシヒン・チベット族と「西番」、および四川側のプミ・チベット族と雲南側のプミ族の比較によっても示している。シヒン・チベット族やプミ・チベット族のようにチベット仏教を深く受容した集團よりも、チベット仏教の影響が薄くイトコ婚を繰り返して従来の慣習を残してきた「西番」やプミ族の方が、チャン族と文化的に類似する要素が多いというのである。同様にナシ族においても四川省の俄亜ナシと雲南省のモソ人には祭山会があり、特に俄亜ナシとチャン族の間では白石崇拜、生活習慣、祖先起源伝説などにおいて共通性があることが、指摘されている。

これらの章では、チャン族とチベット系諸民族の文化的な類似性が述べられている。そのうえで著者が疑問視するのは、それにもかかわらず、近年これらの事象が「チャン族固有の」文化的記号として前面に押し出されていることである。特に、二〇〇八年五月一二日に汶川地震が発生すると、その傾向はますます顕著になった。

第一章〜第四章にかけては、本来はチャン族だけに特定されないはずの文化的要素が、汶川地震後の復興において、チャン族のものとして語られるようになった経緯を主に論じている。震災後、中央政府はチャン文化の保護と復興を推進するために、多くの資金を投入してチャン族研究を奨励した。そのなかで、羌族文化数字博物館が建設されていくが、そこではチャン族が先述した「禹羌文化」の枠組みで語られており、その文化的要素として碉楼や羌年（祭山会と関係する）などが挙げられている。他にも、チャン族研究ではシピ文化とかかわる経典が編纂されるなどの動きもあった

#### （第一章）

こうしたチャン文化をめぐる表象は、震災復興のなかで景観や民俗として現実に社会に反映されていくことになる。汶川地震の後、多くのチャン族が住むこの被災地は驚異的な速さで復興していくが、それを支えたのが「対口支援」方式であった。「対口」とはペアを組むという意味で、一つの省が一つの地域を担当して支援にあたった。汶川県の場合、広東省が復興支援にあたったが、注目に値するのは、その過程で「禹羌文化」を体現した景観が創られていったことである。つまり、チャン族は禹の子孫であるという思想から、広州市は皇城の入り口に巨大な禹の銅像を造り、顔をチャン族の風貌にして民族融合を演出した。さらに、湛江市は汶川県龍溪郷に「羌人谷」を建設し、そこで白石神、石碉、チャン族文化展示館、五神廟（禹、共工氏、神農氏、無戈愛劍、阿巴白構）などを建てた（第三章）。他方で、震災後に龍溪郷から村ごと成都市の郊外に移転した直台村は、移住先で旧村を思い起こさせるもの

が何もなかった反面、家屋の壁には文字をもたないはずのチャン族の奇妙な「文字」が描かれた(第二章)。さらに、震災後のチャン族地域では、碕楼、石碕、屋上の白石をデザインとした学校、病院、住宅が次々と建てられていった。

著者は、このような政府主導の景観開発が、住民の意識と乖離していることを指摘している。まず、チャン族の間では、禹を自民族の祖であるとする認識に乏しい。次に、五神廟の神々のうちチャン族の間で知られているのは阿巴白構くらいで、他の神々はほとんど知られていない。そして、碕楼、石碕、屋上の白石は、全てのチャン族地域に分布しているわけではなく、岷江上流域の地域文化にすぎない。しかし、こうした「岷江モデル」の文化は、震災後にチャン族固有の文化とされ、こうした文化的要素がなかったチャン族地域でも新たな景観デザインとしてとりいれられるようになっていく(第三章)。

もともと多様であるはずのチャン族文化が画一的になっていく現象は、民俗面

でもみられる。その典型例として第四章で挙げられているのが、羌年である。一九八八年、阿壩藏族羌族自治州は旧曆一〇月一日をチャン族共通の新年、すなわち羌年として制定した。羌年は震災復興後に保護すべき対象とされ、二〇〇九年にはユネスコの無形文化遺産にも登録された。羌年に相当するのが秋の祭山会「リメジ」である。だが、本来チャン族の祭山会は必ずしも旧曆一〇月一日におこなわれておらず、またシビが主催する宗教色が強かったことから、文化大革命の時期には消失していた。それを、政府は、チャン族共通の新年として画一化し、さらに羌年の伝統舞踊として鍋庄舞を定着させようとした。だが、鍋庄舞も「岷江モデル」の文化であり、ギャロン・チベット族の跳躍の動作を新たにとり入れた活動でもあった。それゆえ羌年は、全てのチャン族の間で根付いたわけではなかった。

これらの事例を通して、著者は、チャン族をめぐる二つの異なる次元の文化を論じている。一つは、政府や学者によつ

て主導される「チャン族の特色」としての文化である。ここでは、チャン族の祖先と夏王朝を結びつける「禹羌文化」が核となっている。この種の文化は「多元一体化理論」のイデオロギーに則ったものになっており、それが震災復興の過程で景観や民俗として現地で普及していったのである。もう一つは、チャン族住民の記憶や実践と密接にかかわる、いわゆる生活文化である。もちろん、碕楼、祭山会、白石信仰などは、チャン族の地域にも存在するのだが、同時に近隣のチベット系諸民族の間でも広く分布している。そのうえで、著者は、イデオロ

ギー的なチャン文化が創造される一方で、チャン族による本当の言語や文化が保護されないまま消失していることを危惧している。ただし、本書では異なる二つの文化が対立するだけでなく、時として前者の文化がチャン族の人々に受容される例も挙げられている。その一例が先述した直台村の羌年である。この事例では、漢族地域に突然移入したチャン族の村民が、自らの民族アイデンティティを

示すために、集団型羌年を二〇一〇年より実施していることが描かれている。

以上のように各章を要約してみると苦も無くおこなわれたように見えるが、目下、中国の外の研究者がチベット地域でフィールドワークをすることは簡単な作業ではない。その意味でも、本書が日本で数少ないチベット族およびチベット系諸民族について綿密に記録した、貴重な民族誌であることは言うまでもない。現地ではほどの信頼関係がなければ、これほど厚みのある民族誌を書くことはできないであろう。評者は中国少数民族研究の専門家ではないので、本書の意義や問題点をチベット族やチベット族の研究に位置づけて論じることは私の能力を超えている。だが、著者の問題意識は広東省の漢族地域における評者の調査結果「河合2013」にも通じるものがあるので、ここで本書が、中国少数民族研究という枠を超えて他民族の研究者と対話できる可能性があることを指摘しておきたい。つまり、本書はあくまで中国西部の少数民族を対象とした民族誌であるが、さらに次

のように抽象化できるように思われる。

(1) A集団の文化は一種ではない。また、近隣のB集団と文化的な類似性がみられる【三次元】。

(2) しかし、政治イデオロギーに則り学者が文化を表象することで、A集団の「特色」とされる文化像≡A文化が創出される【二次元】。

(3) A文化は紙の上だけにとどまらず、ある出来事を契機として景観や民俗として現実化する。A文化の記号がA集団地区で拡がり画一化する。同時に、A集団の生活とかわる本当の文化が喪失されていく【二次元→三次元】。

本書において、Aにあたるのがチベット族、Bにあたるのがチベット系諸民族である。A文化の核心は「禹羌文化」であり、地震という出来事を契機として、それがチベット族地域で画一化していく現象を、本書は描き出しているといえる。

ところが、Aをチベット族、Bをチベット系諸民族と限定しなくても通用する事例が、現在の中国では少なからずあるこ

とに気づかされる。その図式を雲南省南部の少数民族、例えばハニ族と彝族に適用し、それぞれAとBで表そう。景観面で見ると、ハニ族の住居は本来多様であったが、そのなかから「蘑菇房」(キノコ型の住居)がハニ文化の「特色」として学術的に選ばれ、そのイメージが文化遺産化に伴ってハニ族地域で広がっている。また、こうした事例は、中国西部の少数民族に限定されることはない。中国東南部の漢族でも、ある程度は該当する。Aを広府系の漢族、Bを客家系の漢族としても同様の議論ができるのである(詳細は拙著「河合2013」をご覧ください)。評者は、各民族集団の「特色」とされる文化が画一化されていく現象を「空間化」と呼んできたが、同様の現象がチベット族でもみられることが分かる。このように、本書の議論は特定の地域や民族に限定されてはいるが、視点を変えれば、より抽象化した次元で議論するための重要なデータを提示している。チベット族研究や中国少数民族研究を超えた議論に展開する可能性を秘めている点にお

いても、本書は注目に値する書物になっているといえよう。

とはいえ、言うまでもなく本書の第一の意義は、汶川地震後の「新生チベット文化」、及び、その認識枠組みでは捉えきれないチベット系諸民族を含む「基層文化」を、綿密に記録し考察したことがある。さらに、付録の論考では、中国人類学の歴史、特に従来言及されることが少なかった一九五〇～六〇年代の研究動向が描かれている。中国の科学史やネイティブの人類学に関心のある読者は、こちらも一読することをお勧めする。

#### 参考文献

- 河合洋尚 2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』風響社
- 松岡正子 2000 『中国青藏高原東部の少数民族——チベット族と四川チベット族』ゆまに書房